

伐採の日々

熊本県 島田 完

まず、現地で心ならずも亡くなられた友のみたまに哀悼のまことを捧げたい。あれから四十五年の歳月が流れ、記憶も薄れているが、客観的に、冷静に当時を偲び、戦争の愚かさを少しでも伝えられればと思ひ、つたない筆をとる。

ダワイ、ダワイとノルマ、ノルマに追われる毎日である。日曜は原則として休日だが、ノルマをカンチャイ(完遂)していなければ駆り出される羽目になる。ことほどさように雨が降ろうと風が吹こうと雪が降ろうと、作業の連続だ。大雪というように頭に「大」の字がつかない限り休めない。熱がある、頭が痛い、腹が痛い、腰が痛い等は通用しない。女医が腹の皮をつまみ、脂肪分が少しでもあれば、ダワイである。

入ソ当時は五立米が二人に課せられた伐採量だった。

ところが、八、十、十五立米と量は増していく。上がるノルマと反比例して体力は目に見えて落ちていく。日本人の競争心を相手にうまく利用された。

丸太を積み上げてつくった収容所の周りは白カバ、モミ、松、エゾ松、トド松、タモ等の原生林の山だ。見たばかりでどぎもを抜かれるような大小の木、木が我々を待っている。山に着いたら下刈りをして荷物を置き、火を起こし一服。一服といっても本当のたばこはまれである。粗末な茶がらを干したものはまだましな方で、ヨモギの葉、モミジの葉等を新聞紙でくるくると巻き、煙を出しているだけである。煙はのどをけたくっていき、味も何もない。体によくないと思ひながらも、また吸っている。

切る木の品定めをして作業開始だ。二人引きの鋸初めて見る鋸、〇・七メートル、一メートル、一・五メートルと各種のものがある。木に鋸を入れ、中心まで達したころ反対側を斧(タポール)で削り、さらに鋸を引く。斧の切れ目に近づくと木はミシッ、ミシッと前傾し、ピリ、ピリッと大きな音に変わる。いくぞ、倒れるぞと叫

び、合図をしながら最後の鋸を引く。木は大きな地響きを立てて地面を打つ。

タポールで枝払いをし、二メートルの物差し（真つすぐな木で各自つくっている）で原木を測り切断する。これを繰り返して、ノルマの目安が立ったところで、二メートルの丸太を一メートルの高さに積み上げていく日課だ。

切りやすい木、切りにくい木があり、作業の段取りに大きな差が出てくる。中身の無いガラン胴の大木でも見つけようものなら、ノコ引きも楽だし、倒すのも早い。ノルマは一ペんに達成できるし、この上ないお客様だった。大きな木を切るときは、鉄でつくったくさびを鋸の目に打ち込み、鋸がスムーズに引けるように、また大木を積み上げるのにトビロを使い、自在に動かせる道具を考え出した。トビロは穂先の長いもの、短いものを持ち、当即即妙に使い分け随分と助かった。日本人の合理性というか、生活の知恵というか、作業上雲泥の差があった。カンボーイもびっくりして見ていた。

積み上げられた材木は、トラックへの積み込み作業が

待っている。夕方になるとブーブーと音を立て、時にはスリッパをしながら、道なき道を登ってくる。力強い力、ボディを見るとUSAと書かれている。ここでもアメリカが頑張っている。科学技術の差が今日の我が身かとあきらめる。

積み込みでもトビの力が発揮される。「ヨイヤコラ」「一、二の三」と掛け声も力を入れようで変わってくる。

もろもろの花が一斉に咲き誇る五月から、草の芽、木の芽がふくらみ、キノコが立ち、実がなり、腹を満たしてくれる九月初旬までの山行きは、辛い中にも一縷の光がさすのである。松の木を倒し、松の実でも見つけようものならまた格別である。松ヤニで手は真黒になりながら夢中で麻袋に入れていく。早速たき火の中で焼く。ピーナツに似た形、味は最高で、貴重な栄養の補給源だ、一人や二人で食べられるものではなく、仲間と分け、カンボーイにも麻袋一杯をプレゼント、彼らも人の子、顔いっぱい笑みを浮かべている。ノルマも大目に見てもらい、神様、仏様、松の実様だ。満ち足りた晩秋のここまでである。

いよいよ冬の到来である。零下三十度前後の気温は、身を刺すような痛い寒さで、想像を絶し、言葉が知らない。防寒の服、手袋、帽子、靴と一応の支給は受けているが、程度が悪く、よくぞ耐えたと思ひ出しては身の毛がよだつ思いだ。

着ぶくれて、ただでさえにぶくなる行動は、ちょっとしたものにもつまづき、転ぶというありさま。その姿は哀れというほかなく、捕われの身の悲哀を感じ、「冬の時代」という表現がピッタリだ。雪の凍った上で火をたき、体を温めて仕事にかかる。氷の上に座っての作業で痔が痛む。血がにじみ、どうしようもない。火にあたることで、また作業だ。冬の火はツルベ落として、木枯らしがヒューヒューと吹きつける。暗い夜道をトボトボと足を運ぶ。元気な人が急に目が見えないと言う。夜盲症、目くらである。ビタミンAの欠乏、栄養不足がさらに進んでいる。明日は我が身と、手を引く。

冬の後半になると、かねて蓄えていたまきが底をつき、三十センチの丸太を担いで帰る。肩に重さが食い込

む。しかし、命綱だから懸命に担いでくる。部屋に入り暖をとり、雑炊を流し込んで、やっと生気をとり戻す。

冬は特に体力の消耗が加速され、毎日が何とか生きようとする死との闘いでもあり、死と直面したときの人間の生命力の強さをしみじみと感じる日々でもあった。

疲れた体を、蚕棚のような寝台に横たえ、いつ帰るともわからぬ寂しさに耐えながら故郷の山、川、肉親、恋人のこと等を考え、いつしか深い眠りについていた。

シベリア抑留体験記

滋賀県 村田 英信

満州国三江省方正県興農合作社において農民指導の公務員として三年間勤務、昭和二十年五月現地心召、五月二十一日綏陽七六四部隊に入隊。

八月初旬綏芬河よりソ連軍の侵攻に遭い、部隊は交戦しながら朝鮮方面に向かって後退する。連隊長は割腹されたと連隊副官の上甲大尉（自分の中隊長）から聞かさ